The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	遺跡の「解説看板」から探る情報発信の現状と展望 ：「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に向けて
Author(s)	我妻, 佑哉
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71917
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.

平成３０年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	わがつま　ゆうや 我妻　佑哉	学部 学科	文学部 人文学科	学年	２年
ふりがな 共　同 研究者氏名	あかぎ　みやこ 赤木　都胡	学部 学科	文学部 人文学科	学年	２年
	いわさ　みか 岩朝　美賀		文学部 人文学科		２年
	かんざき　ゆうすけ 神﨑　裕介		文学部 人文学科		２年
アドバイザー教員 氏名	高橋　照彦	所属	文学部		
研究課題名	遺跡の「解説看板」から探る情報発信の現状と展望 －「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に向けて－				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

【研究の目的と計画】

大阪府堺市、羽曳野市、藤井寺市に所在する「百舌鳥・古市古墳群」では現在、世界遺産登録に向けての活動が推進されている。古墳をはじめとした遺跡の意義を、見学者に発信する重要なツールのひとつに、「解説看板」がある。遺跡自体の基礎情報や関連する歴史的背景などが記載される解説看板であるが、説明文章のフォントデザインや図・写真の多寡、看板自体の材質など看板のあり方は遺跡によって大きく異なっている。多言語化などの課題もあるなかで、どのような解説看板が見学者にとってわかりよいのか、ＡＲなど最新技術との親和性はあるかなどを悉皆的に検討する研究はこれまでほぼなされていないのが現状である。

そこで本研究では、現在設置されている解説看板の集成・分析を基軸として、より良い情報発信のあり方を探索・提案することを目的とし、１．解説看板基礎データの収集、２．データの整理と各種分析、３．研究成果の統合と展望の提示、を実施した。

【研究の方法と経過】

本研究において主軸となるのは遺跡の解説看板のデータ収集と分析である。そこでまず基礎資料の蓄積を目的としたフィールドワークを実施し、データの収集を行った。基礎データの収集方法については、共同研究者及びアドバイザー教員を交えて話し合いを重ねた結果、チェックシートを用いた方法が適切であるとの結論にいたった。ただしその詳細な項目については、実際に現地でフィールドワークを実施する中で変更・加除すべきものがいくつかでてきたため、適宜チェックシートのバージョンアップと欠落した項目の補足調査を行った。

解説看板基礎データの収集対象遺跡とフィールドワーク実施日時は下記の通りである。

日時	対象	参加者	チェックシート枚数
8/21	百舌鳥古墳群（１）	赤木・岩朝・神﨑・我妻	35 枚
9/13	百舌鳥古墳群（２）	赤木・岩朝	19 枚

9/13	佐紀古墳群	神﨑・我妻	12 枚
9/15	古市古墳群（１）	岩朝・我妻	15 枚
9/16	姫路城	神﨑・我妻	20 枚
9/17	古市古墳群（２）	赤木・岩朝	11 枚
9/19	石見銀山	赤木・岩朝・神﨑・我妻	17 枚
9/20	出雲市周辺遺跡	赤木・岩朝・神﨑・我妻	2 枚
9/22	百舌鳥古墳群（３）	岩朝・神﨑	4 枚

以上の調査により、計 135 枚の看板詳細データを獲得した。

調査方法については、以下のとおりである。

１．具体的な調査の方法

①看板種類ごとの調査方法（遺跡の名前以外に遺跡に関する説明文を持つもの）

…チェックシートの記入・写真撮影（正面・裏・左横・右横・斜め・隣に別の看板がある場合にはその位置関係が分かるアングル等）・地図に場所記入をおこなう。

②そのほか（遺跡の名前のみ、「△まで～m」といった案内表示）

…写真撮影(基本は正面のみ。文字などがある場合はその面も追加)・地図に場所記入をおこなう。

２．項目ごとのチェックシート記入法

- 看板の大きさ…遺跡に対する解説が書かれたパネル部分の法量など数値を記入。
- 看板までの高さ…パネル解説部分までの高さの数値（センチメートル単位）を記入。傾斜がある看板については看板までの高さのほか、傾斜が一番高い部分（高部）についても記入。
- 文字の大きさ…解説文の文字サイズ（何センチメートル四方）か記入。
- 言語…タイトル部分と説明部分の両方について使用言語を記入。
- 整備状況…良好・普通・不良の三段階で記入。
  - ・良好…汚れなどがほとんど確認できないもの。
  - ・普通…多少の汚れなどがあっても見ることに支障がないもの。
  - ・不良…汚れなどによって、見ることに支障がでる可能性があるもの。
  - ・そのほか、汚れの種類など状況に関する自由記述。
- 看板の形状…板状・柱状・置石状（石の本体に看板パネル取付）などを記入。
- 地図…看板が遺跡に対してどの位置にあるかを地図で記入。
- 備考欄…その他記入すべき事柄について記入。

集めたデータを整理したのち、①視認性、②ハイテク性、③コンテンツ、④立地、という４つの検討項目を設定し、各分担を決めてデータの解析を試みた。

研究を実施するにあたり、研究計画の調整、研究進捗の中間報告などを適宜実施した。

7/4…第１回（研究計画の具体的な調整）

9/27…第２回（進捗報告と分析方針の確認）

11/9…第３回（進捗報告と分析方針の確認）

上記のほか、適宜小ミーティングを実施。

【研究の成果】

１．解説看板基礎データの収集

収集したデータを、調査を行った①百舌鳥古墳群、②古市古墳群（羽曳野市・藤井寺市）、③佐紀古墳群・平城宮、④姫路城、⑤石見銀山・出雲市周辺遺跡、ごとにそれぞれ集約し、その特徴や傾向に対して検討を行った。以下、各遺跡の解説看板における詳細を述べる。

①百舌鳥古墳群の解説看板は、約 20 種を確認した。うち約半数が同一種類の看板であった。この種類の看板は堺市の統一規格によるもので、主要な古墳一基につき一枚設置されており、コンテンツも優れたものであった。一方で、これ以外の看板の中には整備不良なものも見受けられた。世界文化遺産の候補地に含まれている古墳でも、場合によっては看板がない・もしくは整備されていない場合があった。

②-1 古市古墳群の解説看板（羽曳野市）は、約 3 種を確認した。主要な古墳につき 1 枚以上の設置が認められるほか、ルート案内を兼ねた大型の解説看板も認められた。13 枚中 10 枚が羽曳野市の統一規格によるものであるが、羽曳野市規格内での看板サイズや文字サイズが細かく分化している点が羽曳野市の遺跡解説看板の特徴であると言える。看板サイズに関しては特にばらつきが見られ、長方形のものだけでなく正方形のものも存在する。

②-2 古市古墳群の解説看板（藤井寺市）は、約 2 種を確認した。主要な古墳 1 基につき 1 枚の設置が認められた。12 枚中 11 枚が藤井寺市の統一規格によるもので、羽曳野市規格のものと比較してより細部まで規格化されている。古いものについては基本的に 2016 年の藤井寺市規格の遺跡解説看板を設置する際に一新されたと考えられるが、例外として 1 枚のみ 2014 年度の別形態の解説看板が残存していることを確認した。

③平城宮/佐紀古墳群の解説看板は、約 12 種を確認した。平城宮の解説看板は遺跡や遺構ごとに 1 枚設置されているほか概説的な看板も存在する。また、佐紀古墳群では古墳の周囲を入念に探したにもかかわらず解説看板の見つからないケースも多く、発見が難しいか、または設置されていない可能性が高い。両遺跡の解説看板にはそれぞれ共通の規格が存在しないが、約 8 割の看板にタイルの使用が認められた。一部にはタイルの間から雑草が生えているものもあった。

④姫路城の解説看板は、約 18 種を確認した。解説看板は、屋内外の遺構につき 1 枚の設置が認められるほか、姫路城の種々の歴史についての概説的な看板も多い。傾向として、「全体としての共通規格の採用」ではなく、「展示場所ごとの共通規格の採用」が挙げられる。屋外には、「金色の金属地に黒字の解説がある」場合と、「白背景に黒字の解説がある」場合がある。屋内には、「緑背景に白地の解説がある」場合が多い。

⑤石見銀山・出雲市周辺遺跡の解説看板は、約 18 種を確認した。概ね住居跡・工房跡・間歩（採掘坑）等の遺構に対して 1 基以上の設置が認められた。設置年度については無記載の場合が多かったが、石見銀山の世界遺産登録（2007）前後の設置が多いと推測している。全 18 種中 11 種が木目調を採用するなど、周囲の環境や景観に合わせた解説看板の設置傾向が認められた。

２．収集データの整理と分析

収集したデータをもとに、①視認性、②ハイテク性、③コンテンツ、④立地の４項目を設定し、検討を行った。以下各項目における概要を述べる。

①視認性の分析においては、解説文や遺跡名などのフォントサイズや、看板のサイズ、形状、色などをもとに、解説看板利用者の基本的な利便性を検討した。その結果、視認性を意識した文字サイズ・色調を選択していることが確認できた。一方で、見やすさばかりを追及するのではなく、遺跡の景観などを配慮した素材や看板サイズを用いることで、解説する対象と共存しようとする様子も多く確認できた。

②ハイテク性の分析では、近年徐々に採用されるようになってきたＡＲ・ＶＲ技術やＱＲコードの活用実態を探った。その結果、QR コード・AR・音声ガイドを持つ看板の全体の普及率として、約 19%の数字を得ることができた。特に目立ったのは古市古墳群「藤井寺市」の看板で、QR コードを使用していた看板が 100%であった。内容に関しても、普通は見ることのできない上空からの映像であったり、あるいはより詳しい補足の情報であったりと、見学者の学習意欲にこたえるものものとなっている。そのほかに、VR を用いた展示「百舌鳥古墳群」と「大久保間歩」についても取材した。最先端の技術を用いた新しい解説方法は、体験している人も多く、力を入れているポイントであると感じた。

③コンテンツの分析では、写真・挿図の有無や、レイアウト、多言語解説の有無などに着目した。その結果、コンテンツの内容について⑴広域地図、⑵周辺地図、⑶遺構・検出状況写真、⑷遺物等写真、⑸全体写真、⑹その他の図、の大まかな６種類の分類に基づくと、最も多く使われたコンテンツは遺跡の全体や大部分を写した全体写真であることが判明した。特に古墳群においてはこの全体写真と遺跡の近辺を示す周辺地図が多く見られた。地図や挿図などの複数種のコンテンツを併用することで、多様な層の観覧者の関心を引きやすく、より理解しやすい解説看板になると考えられる。

④立地分析では、遺跡自体に対して解説看板がどのような立地をとっているか、古墳群など広いエリアについて地図などを活用した試みがなされているかなどを検討した。その結果、解説看板とその対象となる遺跡の位置関係は概ね近いものであり、道路や見学路に面した位置に設置されているものが多いことがわかった。そのうえで、解説看板の立地条件を⑴土地利用上（住宅地等）の制約による立地［百舌鳥・古市古墳群］⑵見学者・通行人に対するアピールを重視した立地［平城宮・石見銀山］⑶遺跡構造上の制約により立地［姫路城］といった３パターンへの分類を行うことができた。百舌鳥古墳群の場合、住宅等による厳しい制約を受けつつも、解説看板上の地図に古墳の形状をよく視認できる『写真撮影ポイント』を設けるなどユニークな試みがなされていた。

３．成果のまとめ

本研究の成果として、実地調査を行った遺跡ごとの解説看板の特徴と傾向、遺跡解説看板の視認性・ハイテク性・コンテンツ・立地などについて分析・考察の結果を示すことができた。これらの結果をもとに、「遺跡解説看板におけるより良い情報発信のありかた」について現状や今後の展望を示すことで、成果のまとめとしたい。

①遺跡解説看板の形をとる情報発信の現状

本研究の実地調査と分析の結果から、現在設置されている遺跡解説看板がどのような情報発信のありかたを志向しているかについて、その現状に対する検討を行った。その結果、遺跡解説看板による情報発信は「多くの人に遺跡への理解を促す」という方針と「周囲の環境に配慮する/制約を受ける」という状況の２つの側面を有することが挙げられた。

世界遺産登録を目指す百舌鳥・古市古墳群の解説看板をはじめとする比較的最近に設置された解説看板は、視認性・ハイテク性・コンテンツともに充実したものであり、遺跡を訪れる多くの人に対して適切に情報を伝えられるものと考えられる。しかし、立地的に発見が難しい解説看板も多数存在するという、情報発信における障壁も存在する。また、石見銀山や姫路城といった当時の雰囲気を重視する遺跡においては景観に配慮した形態・色を用いるなどして解説看板と対象とする遺跡とが共存体制をとっている一方で、文字サイズやコンテンツの面で制約を受けることになる。

遺跡解説看板が持つこのような利点と制約の二面性は、対象となる遺跡の限られた状況において一定の工夫を凝らした結果生じたものともいえる。したがって、現状の解説看板における「より良い情報発信のありかた」は複数存在し、遺跡や自治体によって取捨選択されるべきものと考えられる。

②遺跡解説看板の形をとる情報発信の今後の展望

前述の通り、解説看板におけるより良い情報発信を志向する中では利点と制約が併存する。こうした中で、「どういった取り組みが今後の遺跡に対するより良い情報発信につながるか」について検討を行った。

まず１つ目には、「最新技術の活用」が挙げられる。この背景には、一枚の解説看板で伝えられる情報量には限りがあり、より多くの情報を伝えるためには IT 技術の活用が有効であると考えた。現状でも、VR や AR や QR コードの活用は存在し、実地調査では利用者の姿が多く確認された。このような取り組みは、解説看板のもつ制約の側面を様々な形で克服する方策であり、特に視認性やコンテンツの面で飛躍的な情報量の向上を見込むことができるだろう。

次に、「遺跡の面的な整備」が挙げられる。この背景には、発見が難しい解説看板や、遺跡・遺構と解説看板の位置関係が多少遠い例が存在するという現状がある。具体的には、「解説看板の位置を周遊地図上に示す」、「解説看板は必ず見学ルートまたは大通りに面する場所に設置する」といった解決策が示された。またこの点でも、インターネット上の地図（Google マップ等）を用いて解説看板の立地をマップ上に落とし込んだ周遊ルート案を制作するというインターネット技術を用いた案も挙がった。こうした取り組みにより、遺跡を訪れるより多くの人に情報が伝わり、解説看板と遺跡の共存もより強固なものとなると考えられる。

申請先学部　　文学部　採択番号　No.

本研究では、多様な遺跡の多様な遺跡解説看板の実地調査を行い、その特徴と傾向や項目ごとの分析を通して解説看板のより良い情報発信のありかたについての検討を行った。その結果、現状の解説看板には様々な形で利点と制約の二面性が存在することと、そうした状況下でより良い情報発信に向けた今後の展望を明らかにした。

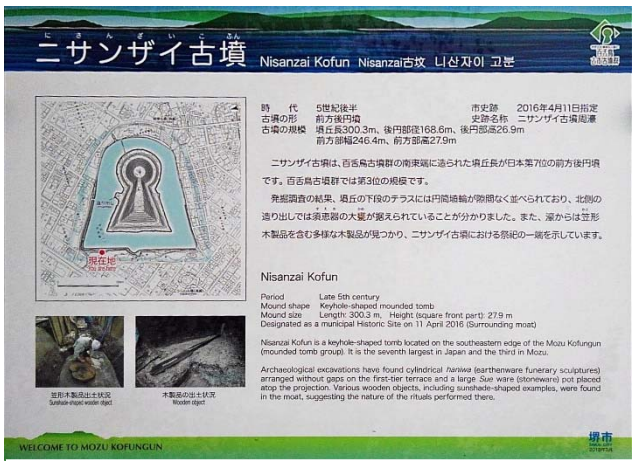

図１　百舌鳥古墳群土師ニサンザイ古墳解説看板

図２　古市古墳群（羽曳野市）墓山古墳解説看板

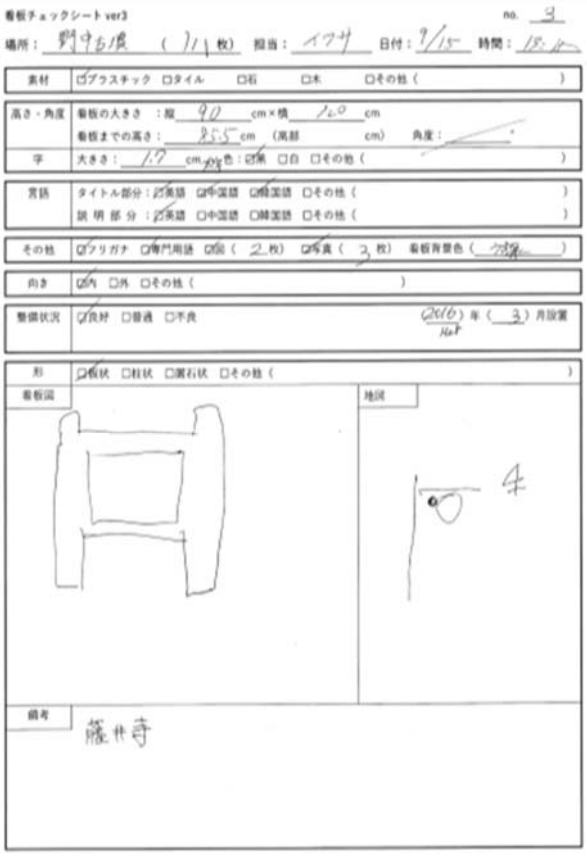

図３　チェックシート記入例（野中古墳）